

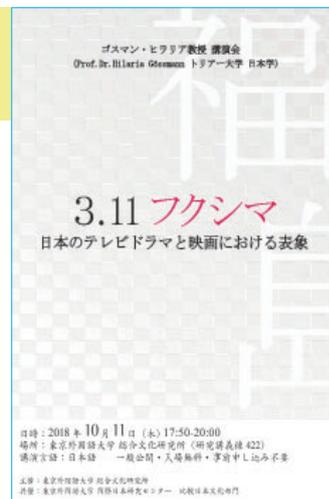
- 講演「3.11 フクシマー日本のテレビドラマと映画における表象—」
“Fukushima 3.11: Representations in Japanese Television Dramas and Cinema”……………P1
- 国際日本語教育部門「多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育」第4回研究会
“Japanese Compound Verbs and Japanese Language Education from a Multilingual Perspective”……………P1
- 国際日本語教育部門「多様化する日本語教育」第2回研究会「英語を媒介語とした初級日本語の指導について」
“Elementary Japanese Language Instruction using English as an Intermediary Language”……………P2
- 対照日本語部門共催 共同研究会「多言語社会 台湾の「日本語人」に見られる言語混用と分析」
“Multilingual society: mixed languages and analysis in ‘Nihongo-jin’ in Taiwan Co-hosted by TUFs ICJS Contrastive Language Division”……………P3
- 比較日本文化部門主催 ワークショップ「ラテンアメリカの近代から日本帝国の歴史的展開を捉え直す」
“Reevaluating the Historical Development of the Japanese Empire from the Perspective of Modern Latin America”……………P4
- 国際シンポジウム「国際日本研究と日本語教育 『日本をたどりなおす 29の方法—国際日本研究入門』：私の活用法」
“International Japan Studies and Japanese Language Education: How I use ‘29 Ways to Retrace Japan’”……………P4
- 国際シンポジウム「次世代に向けた日本研究の可能性—その2・中南米—」
“Potential for the Next Generation of Japan Research 2: Central and South America”……………P5
- 比較日本文化部門「翻訳と近代」報告
Comparative Japanese Culture Division “Translation and Modernity” Report……………P6
- 対照日本語部門「日本語と外国語の対照言語学的研究」第27回研究会
“Contrastive Linguistic Research on Japanese and Foreign Languages” Workshop……………P6
- 今後の活動予定（2019年4月～2019年9月）……………P8

講演「3.11 フクシマー日本のテレビドラマと映画における表象—」 “Fukushima 3.11: Representations in Japanese Television Dramas and Cinema”

日時：2018年10月11日（木）17:50-20:00
会場：東京外国語大学 総合文化研究所（研究講義棟 422）
講師：ゴスマン・ヒラリア教授（Prof. Dr. Hilaria Gössmann トリアー大学 日本学）

総合文化研究所との共催で開催されたヒラリア教授の講演では、テレビドラマが原発事故を直接扱わないこと、そこにスポンサーへの配慮が働いていることが示唆されたあとで、園子温監督の『希望の国』（2012）と太田隆文監督の『朝日のあたる家』（2013）をフォーカスすることで、明確な社会批判とディストピアの文脈が提示された。日本国内でも知られる機会が少ないヴィジュアル作品であるが、その批判的メッセージは正しく解釈され、分析の対象となった。それによってまた、全体的な日本国内のメディア状況が浮かび上がることになった。

なお詳細な報告文は、西岡あかね氏による「ヒラリア・ゴスマン氏（トリアー大学）講演会 3・11 フクシマー—日本のテレビドラマと映画における表象」（東京外国語大学総合文化研究所 総合文化研究 第22号、2018年）を参照された。 （友常勉）



In a lecture hosted together with the Institute of Transcultural Studies, Professor Gössmann explained how television dramas have not directly dealt with the topic of the incidents at the nuclear power plant, and how this is due to consideration paid to sponsors. She then revealed the contexts of clear social criticism and dystopia, focusing on Sion Sono’s 2012 film *Kibō no Kuni* (“Land of Hope”) and Takafumi Ōta’s 2013 film *Asahi no Ataru Ie* (“The House of the Rising Sun”). (Tsumoto Tomotsune)

国際日本語教育部門「多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育」第4回研究会 “Japanese Compound Verbs and Japanese Language Education from a Multilingual Perspective”

日本語の語彙においては、複合動詞の出現頻度は高いが、日本語学習者には習得が困難である。日本語教育における複合動詞の効果的な指導法を開発するために、国際日本研究センターでは、日本語の複合動詞を多言語との対照研究を通して、効果的な日本語の複合動詞研究を

行っている。
「多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育第4回研究会」では、日本語の複合動詞を、ベトナム語および中国語と比較し、言語教育への応用を考察した。

第一発表「ベトナム人日本語学習者による日本語複合動詞の理解実態」では、ベトナム国立ダナン外国語大学日本語学科の教員でもあるファム ティタインオ氏(東京外国語大学博士前期課程)が、複合動詞のうち、アスペクト複合動詞と呼ばれる「～こむ」「～だす」「～上げる/上がる」の移動・状態変化の習得状況について、ダナン外国語大学の日本語学科専攻の学生への調査を行い、移動の意味は理解が容易である一方で、状態変化を表す用法については、理解が難しいことを報告した。ベトナム語を母語とする日本語学習者は、日本社会においても重要度が高まっており、日本語教育においても習得が困難な複合動詞の教育を、母語との比較からどのように教えるかという日本語教育への課題を考える出発点ともなる貴重な研究である。

者コーパス誤用検索サイト」の学習者コーパスに基づく複合動詞の習得について報告した。研究対象の中国語学習者コーパスは、上記「多言語コーパス」において公開されている本学中国語専攻の日本語母語の中国語学習者コーパス(中上級者授業時における中国語作文)及び非公開の英語母語話者の中国語学習者コーパスである。張正氏によれば、学習者の母語が日本語か、英語かによって、「完了/未完了」に関わる中国語アスペクト複合動詞の習得が大きく異なることが観察される。例えば、中国語母語話者コーパスにおいて、アスペクト複合動詞の後項部分として頻度が高い<- 到 dao><- 成 cheng><- 上 shang>について、英語母語話者においては、ほとんど脱落がみられないのに対し、日本語母語話者においては、脱落が顕著であり、学習者の母語によって、習得状況が異なることが観察される。

全体ディスカッションでは、その要因として、日本語においては、英語・中国語のSVO語順とは異なり、統語構造がSOV語順であるため、複合動詞語彙構造もOV構造であること、中国語の結果複合動詞は、日本語の自他対応の自動詞に相当すること、という日本語の特性に起因する可能性が論じられた。張正氏の発表は、日本語と中国語の複合動詞の比較を通して、中国語母語話者への日本語複合動詞の教授法開発のための、貴重な対照研究といえる。(望月圭子)

東京外国語大学 国際日本研究センター
国際日本語教育部門主催 部門内「複合動詞研究プロジェクト」

第4回研究会

発表内容
ファム ティタインオ
ベトナム人日本語学習者による日本語複合動詞の理解実態

多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育

<一般公開>

日時
2018年12月1日(土)
午後2時～4時30分

場所
東京外国語大学
府中キャンパス 研究講義棟
語学研究所(419室)

国際日本語教育部門
伊藤辰都子 大津友美 佐野洋 鈴木智美
鈴木美加 宮城徹 望月圭子 坂本憲

お問い合わせ
TEL: 042-330-5754
E-MAIL: info-icjs@tufs.ac.jp

国際日本研究センター

第二発表「日本語母語話者による中国語のアスペクト複合動詞の習得」では、張正氏(東京外国語大学博士後期課程)が、リーダーとして構築した本研究センターHP上のオンラインリソースサイト「多言語作文コーパス」で公開している「英語・中国語・英語学習

日時：2018年12月01日(土) 14:00-16:30
会場：東京外国語大学 語学研究所(研究講義棟 419)

The first presentation was given by Phạm Thị Thanh Thảo (MA student, TUFS), who holds a teaching post at The University of Danang, University of Foreign Language Studies. She presented the results of a survey completed by Japanese majors at her home institution, concerning acquisition of motion and change of state meanings of the compound verbs “～komu”, “～dasu” and “～ageru/agaru”. While motion meanings were easy for learners to comprehend, comprehension of change of state meanings was difficult.

Zhang Zheng (PhD student, TUFS), then presented “The Acquisition of Chinese Aspectual Compound Verbs by Japanese Native Speakers”. Analysis of data in the “Learners' Error Corpora of Chinese Searching Platform” published on the TUFS ICJS homepage revealed large differences between Japanese and English native speakers in the acquisition of Chinese compound verbs related to the perfective/imperfective distinction, demonstrating how learners' native language can affect the acquisition of Chinese grammar. (Keiko Mochizuki)

国際日本語教育部門「多様化する日本語教育」第2回研究会
「英語を媒介語とした初級日本語の指導について」

“Elementary Japanese Language Instruction using English as an Intermediary Language”

日時：2019年1月25日(金) 14:20-15:55
会場：東京外国語大学 留学生日本語教育センター棟 215 教室

現在、日本語教育は、その地域、対象、目的、学習者、学習方法、教師など様々な面において多様化している。現場の視点からそれらの多様化の状況を共有し、今後の日本語教育についてともに考えようという趣旨のもとに、連続研究会を開催している。1回目の研究会は2018年9月に開かれ、本学オープンアカデミーにおける日本語指導者養成プログラムについて、および日本語教育関係の出版社における教材編集を切り口として、それぞれ担当の方から話をうかがい、多様化し、変化を見せる日本語教育の現状について知り、参加者間で意見交換をすることができた。

今回、2回目の研究会では、杏林大学の嵐洋子氏(日本語音声学、日本教育学)をお招きし、英語を媒介語とした初級日本語の指導について、話を伺った。国内の日

本語教師養成講座等では、日本語教育の教育実習を行う際、基本的に媒介語の使用を想定せず、直接法による指導技術の養成を行うことが多い。しかし、インターンシップなども含め、日本語教育を専門とする大学生・大学院生が実際に海外の大学等の日本語教育現場において日本語教育に携わる時、そこでは現地語もしくは国際語としての英語を媒介語とした指導を求められることも多い。

国際日本研究センター国際日本語教育部門主催

「多様化する日本語教育」
第2回研究会

2019年1月25日(金) 14:20～15:55
東京外国語大学 府中キャンパス 留学生日本語教育センター 215 教室
<一般公開、申込不要>

14:20～14:25 趣旨説明
14:25～15:25 「英語を媒介語とした初級日本語の指導」
発表者 嵐 洋子氏(杏林大学:日本語音声学、日本語教育学)
15:25～15:55 質疑応答

趣旨：現在日本語教育は、地域、対象、目的、学習者、学習方法、教師などさまざまな面において多様化している。現場の視点からそれらの多様化の状況を共有し、今後の日本語教育についてともに考えるための研究会を連続して開催する。2回目の今回は、インターンシップなどを含めた海外の日本語教育現場を視野に、英語を媒介語とした教授法について、杏林大学の嵐洋子氏にお話を伺う。

国際日本語教育部門
伊藤辰都子 大津友美 坂本憲 佐野洋 鈴木智美 鈴木美加 宮城徹 望月圭子

お問い合わせ：国際日本研究センター
TEL: 042-330-5754
E-MAIL: info-icjs@tufs.ac.jp

国際日本研究センター

また、日本国内でも、多様化する学習者を抱える地域の日本語教育の現場では、媒介語の使用は避けて通れない問題である。このような点において、教師養成と実際の教育現場には、媒介語の使用に関してある種のギャップが存在すると考えられることから、2回目の研究会のテーマが設定された。

嵐氏の講演では、まず、媒介語として英語を使用することについて、参加者それぞれが教師としてのビリーフを確認することから始まり、媒介語（英語）を使用した指導現場の実践について、その具体例を音声データで確認しながら進められていった。英語の使用が効果的になり得る場面としては、文法説明や社会・文化的背景等の説明など、学習者の理解を深めるための使用、また学習者からの質問に回答したり、冗談やユーモアなどでリラックスした雰囲気作りをするなど、学習者の不安を取

り除くことにつながる使用などの例が挙げられた。そのほか、授業手順や教室運営に関する指示・説明に使用されることで、運営の効率を高め、誤解をなくするという効果があることも指摘された。このような実践には、学習者・教師を含め、当該のコースおよび教育機関において、媒介語の使用についての共通理解が得られていることがもちろん前提となる。

約20名の参加者の中には大学院生および学外教育機関の関係者も多く、実践的な視点から活発な意見交換が行われ、媒介語使用を本格的に考えるならば教師のトレーニングも必要となることから、嵐氏の研究成果が教師養成の現場に有効に生かされていくことを望む意見が聞かれた。

今後の日本語教育の1つの可能性として、媒介語使用に着目していくことは重要であろうという認識を参加者間で共有し、閉会となった。(鈴木智美)

The International Japanese Education Division at TUFU ICJS invited Kyorin University's Yōko Arashi (Japanese phonetics, Japanese language education) to the 2nd "Diversifying Japanese Language Education" seminar, held at the Japanese Language Center for International Students (room 215) on Friday, January 25th, 2019. The topic of the seminar was "Elementary Japanese Language Instruction using English as an Intermediary Language". Most courses and seminars held in Japan do not specify an intermediary language, and train teachers to teach using the direct method. However, when undergraduate and postgraduate students majoring in Japanese language education actually go to teach or do internships in foreign institutions, they are often required to teach using the lingua franca, English. Use of an intermediary language cannot be avoided in classrooms throughout Japan either. It may be important to consider the language of instruction in Japanese language education in the future. (Tomomi Suzuki)

対照日本語部門共催 共同研究会

「多言語社会 台湾の「日本語人」に見られる言語混用と分析」

Multilingual society: mixed languages and analysis in "Nihongo-jin" in Taiwan Co-hosted by TUFU ICJS Contrastive Language Division

主催: 科学研究費補助金 基盤研究(C)研究課題番号16K02661 (研究代表者: 谷口 龍子)
「多言語社会台湾の日本語人ナラティブに見られる言語混用と日本語人フレーム調査」
共催: 国際日本研究センター対照日本語部門

「多言語社会 台湾の「日本語人」に見られる言語混用と分析」研究会

2019年2月8日(金) 13:30-16:00
東京外国語大学 本館管理棟2階 中会議室
入場無料 となたでも参加できます。
司会: 林淑璋 (東京外国語大学教授)

13:30-13:35 趣意説明: 谷口龍子 (東京外国語大学准教授)
13:35-14:05 発表 「多重言語使用の現実とその分析」
台湾原住民とフィリピンの実例より
森口恒一 (静岡大学名誉教授)

14:05-14:35 発表 「Some prosodic traits of Taiwanese-Japanese bilingual speakers: A case study」(英語による発表)
Yueh-chin CHANG and Feng-fan HSIEH, National Tsing Hua University
14:35-15:05 発表 「日台バイリンガルの言語使用における自己開示」
台湾の日本語人ナラティブデータをもとに
林淑璋 (元智大学副教授)

15:05-15:35 発表 「日台バイリンガル国際児のライフストーリーに見られる重層的アイデンティティ」
谷口龍子 (東京外国語大学准教授)

15:35-16:00 まとめ

*都合により発表時間や発表の順番などが変更される可能性があります。あらかじめご了承ください。

お問い合わせ: 東京外国語大学 国際日本研究センター
電話: 042-330-5794 メール: info-icjs@tufs.ac.jp

国際日本研究センター

日時: 2019年2月8日 13:30-16:00
場所: 東京外国語大学 中会議室

はじめに、森口氏から、多重言語使用に関する問題点や言語学者の見解が述べられた。次に、多重言語使用社会である台湾の状況が概観された。台湾では環境や生い立ちにより、中国語(國語)、台湾語、客家語、原住民語、あるいは日本語など複数の言語現象が発生し、習得過程や精密コード(Elaborated Code)、制限コード(Restricted Code)にバラエティがみられること

とする研究が盛んであったが、近年は日台の人の移動や交流、移住の増加により国際児童が増加し、若い世代を対象とする日本語研究、バイリンガル研究、言語習得研究がみられるようになった。

本研究会は、現地における若い日本語使用世代を対象とする実証研究の試みを示す良い機会となったと思われる。当日の会場には30名程度の聴衆が集まった。(谷口龍子)

プログラムは以下の通りである。

- ・趣意説明: 森口恒一 (静岡大学名誉教授)
- ・森口恒一 (静岡大学名誉教授) 「多重言語使用の現実とその分析 -台湾原住民とフィリピンの実例より-」
- ・Yueh-chin CHANG and Feng-fan HSIEH (National Tsing Hua University) 「Some prosodic traits of Taiwanese-Japanese bilingual speakers: A case study」(英語による発表)
- ・林淑璋 (元智大学副教授) 「日台バイリンガルの言語使用における自己開示 -台湾の日本語人ナラティブデータをもとに-」
- ・谷口龍子 (東京外国語大学准教授) (←ツォイ・エカテリーナ (東洋大学講師) による代読) 「日台バイリンガル国際児のライフストーリーに見られる重層的アイデンティティ」

について説明があった。台湾原住民とフィリピンの実例も示された。

続く3つの研究はいずれも同一データを分析したものである。中国語と日本語のバイリンガル話者である台北市内の高校に通う国際児童へのインタビュー・データが使用されている。国立清華大学の張月琴氏と謝豊帆氏はプロソディの特徴について分析された。続いて、林淑璋氏は、インタビュー・データに見られる自己開示に注目し、特徴が述べられた。最後に谷口龍子氏の発表では、ポジショニング理論をもとに、発話者自身が認識する立場と他者との関係性について言語表現の特徴が示された。

これまで台湾における日本語に関わる研究は、日本統治時代に影響を受けた台湾人日本語話者や日本語母語話者を対象

主催: 科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究課題番号: 16K02661 (研究代表者: 谷口 龍子) 「多言語社会台湾の日本語人ナラティブに見られる言語混用と日本語人フレーム調査の試み」

Tsunekazu Moriguchi first gave an overview of issues concerning mixed language use, linguists' perspectives, and the situation in Taiwan, a multilingual society. Taiwan exhibits a multitude of languages, dependent on environment and upbringing, including Taiwanese Mandarin, Taiwanese Hokkien, Hakka, indigenous languages and Japanese. Explanation was given of language acquisition and varieties of elaborated and restricted code, using examples from Taiwan and the Philippines.

The following three presentations all provided analysis of the same data, namely interviews with Chinese-Japanese bilinguals from international families enrolled in high schools in Taipei. Yueh-chin CHANG and Feng-fan HSIEH analyzed prosodic characteristics. Shu-chang LIN focused on subjects' self-disclosure.

Finally, Ryūko Taniguchi used positioning theory to introduce the characteristics of speakers' language concerning their awareness of their own position and relations with others.

Until now, in the field of Japanese studies in Taiwan, much research has been conducted on the influence of the Japanese occupation of Taiwan on Taiwanese speakers or native speakers of Japanese. In recent years, however, increased movement, exchange and migration between Taiwan and Japan have led to an increase in the number children in international families, and research on the Japanese spoken by younger generations or by bilinguals is beginning to appear.

The day's research presentations represented a good opportunity to show the attempts being made to conduct empirical research on the use of Japanese among younger generations outside of Japan. (Ryūko Taniguchi)

比較日本文化部門主催 ワークショップ 「ラテンアメリカの近代から 日本帝国の歴史的展開を捉え直す」 “Reevaluating the Historical Development of the Japanese Empire from the Perspective of Modern Latin America”

東京外国語大学 国際日本研究センター
比較日本文化部門主催 ワークショップ

「ラテンアメリカの近代から
日本帝国の歴史的展開を捉え直す(仮)」

2019年2月22日(金) 12:30-13:30
東京外国語大学 府中キャンパス
留学生日本語教育センター 213教室

←一般公開・参加費無料→

発表者:ガラシーノ・ファクンド氏
(大阪大学大学院博士後期課程)

お問い合わせ:東京外国語大学
国際日本研究センター
電話:042-330-5794
メール:info-icjs@tufs.ac.jp

日時:2019年2月22日(金) 12:30-15:30
会場:東京外国語大学 留学生日本語教育センター棟 213教室
発表者:ガラシーノ・ファクンド氏 (大阪大学大学院博士後期課程)

表記のタイトルのファクンド氏の報告がユニークであったのは、帝国日本の版図の拡大を、非西洋ではあるが東アジアではない、ラテンアメリカから考察しようとしている点にあった。帝国日本の南進論を支えたのは移民事業であり、それが移民国家であったアルゼンチンの状況に一致した。その集約となったのが、アマ

ゾン地域の経済を支えた天然ゴム採取の衰退を受けて、ブラジル・アマゾン地域の州政府が経済開発政策であった。政府は1920年代にわたって外国資本へ大規模な土地を提供した。それはアマゾナス州と日本の実業家との土地コンセッション契約であり、これがアマゾニア

産業研究所の成立をもたらした(1930)。アマゾニア産業研究所は日本外務省、拓務省の補助金を受けた民間事業であった。西洋支配的なグローバルな「有色の分断線」(global color line)に対抗すると目されていたのが日本人移民であり、アマゾン流域は、白人系入植者の支配の圏外にある唯一かつ最後の未開地とみなされていた。そして日本にとっては、「世界最後の富源」における日本人移民が「文明化」の使命を負うという課題を付加されていた。具体的には、ジュート(繊維作物)というグローバルな規模で需要を持った農作物商品は、帝国日本の膨張や入植者の定着だけではなく、同時にアマゾン地域の経済開発や近代化の原動力となることが構想されており、事業を実際になったのが、上塚司、榛葉賛雄といった移民知識人であった。彼らは「東亜新秩序」建設など、本国日本の時事的動向に対応しながら、帝国日本の膨張政策を支え、同時に移民ネットワークの空間をつくりあげていったのである。(友常勉)

The presenter attempted to view the expansion of the Japanese Empire from Latin America, a region part of neither the West nor East Asia. What supported ideas to expand Imperial Japan to the south was immigration, and this matched the situation in Argentina, an immigrant nation. What intensified this in the latter were the economic development policies adopted by state governments in the Brazilian Amazon region, following the decline of rubber extraction, which had supported the economy of the Amazon region. (Tsutomu Tomotsune)

国際シンポジウム 「国際日本研究と日本語教育 『日本をたどりなおす 29の方法－国際日本研究入門』:私の活用法」

“International Japan Studies and Japanese Language Education: How I use ‘29 Ways to Retrace Japan’”

2019年2月22日(金)東京外国語大学国際日本研究センター主催「国際日本研究と日本語教育『日本をたどりなおす 29の方法－国際日本研究入門』:私の活用法」と題した国際シンポジウムが開催された。

第1部では本書を使っている先生方から各自の授業での扱いについてのご報告をいただいた。日本語非母語話者対象として、国内の大学、本学での使用状況について本学教授の鈴木美加氏、海外の大学例として、リオ・デ

ジャネイロ州立大学准教授のキタハラ高野聡美氏の事例、国内の大学として日本大学助教の李婷氏、大学以外の事例として、赤門日本語学校講師の池辺亜由美氏が報告した。

また、日本語母語話者対象として、聖心女子大学講師の清水由貴子氏が大学生に対する授業例を、そして、高校での事例として、川越高校教頭の内田正俊氏により高校の小論文指導の教材として使った事例が報告された。

国内、海外の非日本語母語話者（一部日本語母語話者も含む授業もあった）の授業では、主に上級レベルの学習者対象に、教科書の使い方、実際にどのように教えたかについて報告があったが、特筆すべきは、学習者の自主性に任せ、選んだトピックを掘り下げたり、発展学習として自国の状況について報告したりしたものが、どれも力のこもったすばらしい内容であり、学習者の意識も高められたということが複数の報告者から出されたことであった。

学習者の知的好奇心を喚起する教材として、また、自国を振り返るための教材として効果的に使われている

ことが確認できたと言える。日本語母語話者対象の授業としては、本文を読ませるのではなく、その内容を使って思考力を深めたり、表現力を磨く授業に試用されることも報告された。大学受験のための小論文指導のための基礎教材としての使い方も興味深いものであった。

第2部では本学の伊集院郁子氏の司会によるディスカッションが行われ、最初に本書の執筆、制作者の一人である本学名誉教授の野本京子氏の発題の後、活発な意見交換が行われた。報告にもあったように、いろいろな使い方ができることが本書の特徴であり、また、対象によって使い方を工夫することが重要であることが共有された。今後の補助教材に対する期待や、このような情報交換の機会を作ることについても確認した。今後本書の内容を詳しく解説した教師用指導書とも言えるものの出版も計画されている。

閉会後、会場を移して、情報交換会も開かれ、親睦を深めた。

日時：2019年2月22日（金）13:30-18:30
会場：東京外国語大学 留学生日本語教育センター棟 103 教室



TUFS ICJS hosted an international symposium entitled “International Japan Studies and Japanese Language Education: How I use ‘29 Ways to Retrace Japan’”. First, teachers using the textbook ‘29 Ways to Retrace Japan’ gave reports on how they utilized it in their lessons. Mika Suzuki (TUFS) reported on the situation at TUFS as a case study of lessons for non-native speakers in Japan. Satomi Takano Kitahara (associate professor, Rio de Janeiro State University) reported on lessons given at a university abroad. Ting Li (assistant professor, Nihon University) reported on lessons at a university in Japan. Ayu Ikebe (lecturer, Akamonkai Japanese School) reported on lessons in a non-university environment.

In addition, Yuki Shimizu (lecturer, University of the Sacred Heart) reported on classes aimed at native speakers of Japanese at university level, and Masatoshi Uchida (vice principal, Saitama Prefectural Kawagoe High School) reported on the textbook’s use in essay writing instruction at high school level. Participants then engaged in lively discussion, following an introduction by Kyoko Nomoto (professor emeritus, TUFS), who was involved in the writing and creation of the textbook.

国際シンポジウム 「次世代に向けた日本研究の可能性—その2・中南米—」

“Potential for the Next Generation of Japan Research 2: Central and South America”

国際日本研究センターは、「日本語・日本学研究コンソーシアム」の広がり形成という課題にあわせて、表記のテーマでのシンポジウムを重ねている。昨年は東欧・ロシア地域からのゲストを招いて行った。今年度は中南米を対象とし、それに先立って2018年度の年度末にこのシンポジウムを開催した。

「次世代に向けた日本研究・日本語教育の可能性を考える—リオ・デ・ジャネイロ州立大学の例から」と題したキタハラ高野聡美氏（リオ・デ・ジャネイロ州立大学）からは、東京外国語大学との20年間にわたる交流の経緯と、リオ州立大学の固有性が紹介された。ご家庭の事情で残念ながら欠席となった小那覇セシリア氏からは、スカイプを通してアルゼンチン国立大学ラプラダ大学の紹介がなされた。

小那覇氏が用意されていた報告は、ガラシーノ・ファクンド氏（大阪大学大学院博士後期課程）から、より詳細なアルゼンチンの日本研究史として説明された。それによれば、明治期日本から始まったアルゼンチンの交流史において重要なのは、まず、移民知識人であった榛葉賛雄（しんや・よしお）である。標葉は日本の外務省管

轄の国際文化振興会の連絡員を担当し、国際ペンクラブ大会の開催、ブエノス・アイレス大学での「日本文化講座」の開設など、大きな功績を果たした。

つぎに、1960年代からの日本研究の組織化をにない、エル・サルヴァドル大学東洋学センターをはじめ、アジア・アフリカ研究の基礎をつくったイスマエル・キレス神父である。こうした下地のうえに、1976年にラテンアメリカ・アジアアフリカ学会が結成された。その後、ブエノス・アイレス大学、ラプラダ大学をはじめとして、日本研究・東アジア研究機関が増設された。

最後に、アルゼンチン・日本学生センター（Centro Universitario Argentino Nipon CEUAN）にて開催されている、「日本とアルゼンチンの間での文化的対話」を目的とした「Nikkei 研究自由講座」の試みが紹介された。（友常勉）



日時：2019年2月23日（土）13:30-17:20
会場：東京外国語大学 アゴラグローバル プロジェクトスペース

The International Center for Japanese Studies has held a series of symposiums on the theme of “the Next Generation of Japan Research”, in conjunction with the development of a “Japanese and Japan Studies Consortium”. Last year, the Center invited guests from Eastern Europe and Russia to conduct the symposium. This year the focus is on Central and South America, and a symposium was held at the end of the 2018 academic year. Satomi Takano Kitahara (associate professor, Rio de Janeiro State University) presented “Considering the Potential for the Next Generation of Japan Research: The Example of Rio de Janeiro State University”. Facundo Garasino (PhD Student, Osaka University) presented the history of research on Japan conducted in Argentina. (Tsutomu Tomotsune)

比較日本文化部門「翻訳と近代」報告 Comparative Japanese Culture Division “Translation and Modernity” Report

翻訳という行為の力学をめぐって、報告者の中川氏と山口氏から、次のような提起がなされた。中川氏は、水村美苗『増補 日本語が亡びる時』（ちくま文庫、2018年）を参照しつつ、非西洋の二重言語者である日本人は、西洋のあらゆる知識や技術を日本語に翻訳してきた。それが可能であったのは、そもそも漢文訓読体になじんでいた翻訳者が存在していたからである。それによって、日本語という言葉の可能性は、古層と翻訳された言語・文化などの交響をつくりだし、豊かな文学世界を創出した。他方、現在の英語の普遍言語化がある。この英語普遍言語化は、日本語・日本文学の豊かな世界をも切り崩しているかのように見える。中川氏は、しかしここで大胆に問題提起した。すなわち、世界を翻訳してきた日本語世界は、この英語普遍言語化と同じ方向に向かっていたのではないかと。その意味で、英語普遍言語化に対して日本語は抵抗しないだろうと。その意味で、水村美苗が警鐘を鳴らしたように日本語が減じることにはあるかもしれないが、その条件はすでに日本語そのものが作りだしてきたのだと、いえるのである。近代の翻訳過程を追跡するという点では同じ作業であるが、山

口氏の論証はまったく異なった論点の提起となった。19世紀初頭のフリードリヒ・シュライアーマハーの翻訳理論を参照しながら、「異化的翻訳」と「同化的翻訳」の二つの類型が提示されたあと、シュライアーマハーは、ドイツ語にとって翻訳とは、異質なものととの接触を通して、ドイツ語の固有性を発揮することであること、他者の言語と文化を統合した〈ドイツ語〉を構築することであると結論する。さらにこの主張にフィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』を参照することで、「生きた言語」を話す民族精神というモデルが提示された。すなわち翻訳を通して世界の多様性を包摂し、なおかつ民族精神をうちかためた強いアイデンティティの形成に向けて、翻訳という営みが位置づけられたのである。そしてここから山口氏は、このドイツ語翻訳にあらわれたナショナル・プロジェクトは、近代日本における言語と文学、そして国民アイデンティティ構築のプロセスそのものであったのではないとするのである。つまり、日本語における翻訳の問題とは、〈ドイツ問題〉でもあるという指摘である。いわばドイツを参照しながら、近代日本語と国民国家形成との関係があったという見通しである。

二つの刺激的な報告は、「翻訳と近代」という、設定された主題を大幅に乗り越えていく大きな問題提起となった。今後ともこの議論の可能性を深めていきたい。(友常勉)



日時：2019年3月1日 (金) 16:00-18:20
会場：東京外国語大学 アゴラグローバルプロジェクトスペース

報告者：
中川成美 (立命館大学) 「あらゆる言葉を喰い尽くせー日本語翻訳と近代」
山口裕之 (東京外国語大学) 「近代化のなかの非対称性—鏡像としてのドイツ?」

“Devour Every Word: Japanese Translation and Modernity” Shigemi Nakagawa (Ritsumeikan University)

“Asymmetry in Modernity: Germany as a Mirror Image?” Hiroyuki Yamaguchi (Tokyo University of Foreign Studies)

Chairperson/Commentator: Tsutomu Tomotsune (Tokyo University of Foreign Studies)

One of the presenters, Shigemi Nakagawa, made the following proposal regarding the dynamics of translation. Referencing “When Japanese Dies Out: Revised Edition” by Minae Mizumura (Chikuma, 2018), he proposed that the multilingual Japanese were able to translate all manner of Western knowledge and technology into Japanese because there already existed translators accustomed to dealing with texts in Chinese.

While similarly tracing the process of translation in the modern era, Hiroyuki Yamaguchi raised a completely different point. Referencing the early 19th century translation theory of Friedrich Schleiermacher, he proposed two patterns of translation, “dissimilative translation” and “assimilative translation”. Schleiermacher concluded that for the German language, translation was the demonstration of German uniqueness through contact with the heterogeneous, and the construction of a “German” that was combined with the language and culture of others. (Tsutomu Tomotsune)

対照日本語部門「日本語と外国語の対照言語学的研究」第27回研究会 “Contrastive Linguistic Research on Japanese and Foreign Languages” Workshop

最初に、中国語学が専門の加藤晴子氏による発表が行われた。コーパスの利用は今日の言語研究にとって欠か

せないものであるが、ないものを検索することはできないので、省略の研究方法論が問題となる。

東京外国語大学国際日本研究センター 対照日本語部門主催

『外国語と日本語との対照言語学的研究』
第27回研究会

2019年3月2日(土) 14:00~17:50
東京外国語大学 研究講義棟419号室 語学研究所
<一般公開・参加費無料>

14:00~15:00
発表: 「主語省略の調べ方 ーないものをどうとらえるかー」
加藤 晴子氏 (東京外国語大学: 中国語学)

15:10~16:10
発表: 「東京外国語大学 CEFR-J × 28 プロジェクト : その進捗状況と今後の課題」
投野 由紀夫氏 (東京外国語大学: コーパス言語学)

16:20~17:50
講演: 「音韻論の瘦身化: 条件異音の批判的再検討」
前川 喜久雄氏 (国立国語研究所: 言語学、音声学)

対照日本語部門
谷口麻子 大谷直輝 藤田謙 早津恵美子 藤尾正志 藤岸真砂 三宅登之

問い合わせ先: 東京外国語大学 国際日本研究センター
電話: 042-330-5794 FAX: info@icjst.u-tokyo.ac.jp

国際日本研究センター

日時: 2019年3月2日(土) 14:00-17:50

場所: 研究講義棟419号室 語学研究所

発表者:

加藤 晴子氏 (東京外国語大学: 中国語学) 「主語省略の調べ方 ーないものをどうとらえるかー」
投野 由紀夫氏 (東京外国語大学: コーパス言語学)
「東京外国語大学 CEFR-J × 28 プロジェクト: その進捗状況と今後の課題」
前川 喜久雄氏 (国立国語研究所: 言語学、音声学) 「音韻論の瘦身化: 条件異音の批判的再検討」

本発表では、北京日本学術研究センター「中日対訳コーパス」における川端康成「雪国」のデータを使い、主語省略の差異について、以下の2つの方法を用いた調査が紹介された。

方法Aでは、日本語原文

内でここに主語の省略があるという箇所をマークし検索した。方法Bでは、中国語への翻訳と対照し中国語訳文にのみ主語があって対応箇所がない場合を省略とする方法を使った。2つの方法による結果を比較すると、方法Aによる省略箇所が964箇所、方法Bによる省略箇所が195箇所あった。

次に方法Aによってのみ拾える省略箇所の特徴(日本語と中国語の主語省略の共通点)を実例に基づき概観し、方法Bで拾える省略箇所の特徴(中国語と比べた場合の日本語の主語省略の特徴)に対して、表現の主観性の違いや従属節と主節の関係などの観点から、実例を示しつつ詳細な解説が加えられた。

次にそれぞれの方法の特徴について説明があった。

日本語における主語省略について論じる場合は方法Aによらなければならないものの、省略の多さが強調されるので慎重な定義が必要になる。また、日中両言語の主語省略の相違について論じる場合は方法Bが有効だが、両言語の差異が強調される結果となる。従って両方法は研究目的によって選択・参照すべきであるという結論が述べられた。(三宅登之)

投野由紀夫氏の発表では、現在東京外国語大学で進んでいるプロジェクトの概要と今後の課題についての発表が行われた。主な内容は、①外国語教育の汎用的な枠組みであるCEFRとCEFR-Jに関する紹介、②東京外国語大学のSGU(Super Global University)プロジェクトとして推進されている28の言語を対象としたCEFR-Jに

よる言語能力の評価づけに関する構想の提示、③英語における基準を用いて言語教育資源を整備する試みの紹介、④言語類型論や普遍言語の観点からのCEFR-Jの整理、である。

多言語・多文化共生が進むヨーロッパにおいて、誕生したCEFRは外国語のコミュニケーション能力を測る指標として広く普及しているが、日本人の外国語学習者の大半がAレベル(初級レベル)という事もあり、投野氏を中心に日本人学習者に合ったCEFR-Jが開発されている。東京外国語大学のプロジェクトでは、CEFRに準拠した多言語教育資源の構築や指導評価システムを構築することで、教育評価の可視化を目指している。また、発表では、音韻・形態・統語・意味・文字などが異なる言語や、蓄積された言語データが異なる言語に対して、統一的な評価基準を作る難しさも示された。(大谷直輝)

最後に、国立国語研究所教授であり現在クロスアポイントメント制度(混合給与制度)によって東京外国語大学教授でもある前川喜久雄氏による講演が行われた。

現在の日本語研究において、条件異音などの形で音韻規則の対象とされている音声現象のなかには、〈音韻規則〉という記号操作の対象とみなすよりも、生理・物理レベルの〈音声現象〉として扱う方が理に適用のものが含まれているというみこみのもとに、日本語の代表的な異音現象を、客観的な方法で検討した。最初に、条件異音とみなすことのできる音声現象がそなえているべき特性を明らかにしたうえで、具体的な検討に入った。具体的には次の4つの点、すなわち、①/z/の調音様式、②母音の無声化、③発話末促音の調音位置、④イ段モーラ子音の口蓋化、⑤アクセント句頭のピッチ上昇の五つの変異現象、を検討したが、このうち④以外はすべて条件異音として扱うべきでないという結論が得られた。そして④についても、今後の研究の進展次第で同じ結論が得られる可能性が否定できない。現在の日本語音韻論は大幅にスリム化することができる。この結論は、おそらく音韻論一般にあてはまるのではなかろうか。(前川喜久雄、早津恵美子)

Presenter: Haruko Kato “Searching for Omitted Subjects: How to Look for Something that isn’t there” Two methods of researching omitted subjects were introduced, using data from “Snow Country” by Yasunari Kawabata, included in the “Chinese Japanese Parallel Corpus” (Beijing Center for Japanese Studies). Method A involved searching for subject omissions in the original Japanese text, and method B involved exclusively counting instances where the subject appeared only in the Chinese text. The 964 and 195 examples thus acquired were analyzed with reference to differences in the subjectivity of expressions and the relations between main and subordinate clauses(Takayuki Miyake).

Presenter: Yukio Tono “The CEFR-Jx28 Project at Tokyo University of Foreign Studies: Current Progress and Issues Going Forward”The CEFR has become prevalent as a measure of communicative ability in foreign languages. At Tokyo University of Foreign Studies, Yukio Tono and his team have developed the CEFR-J, adapted to learners whose native language is Japanese. The aim is to visualize educational evaluation by developing resources for multi-lingual education and a system for instruction and evaluation (Naoki Otani).

Presenter: Kikuo Maeakawa “The Reduction of Phonology: A critical Reappraisal of Conditional Allophones” In current research on Japanese, it makes more sense to consider “voice phenomena” rather than “phonological rules”: this was the assumption made by the presenter when considering the following representative allophone phenomena in Japanese. ① patterns of articulation of /z/; ② the devoicing of vowels; ③ the articulation position of final geminate consonants; ④ palatalization of consonants preceding the vowel “i”; ⑤ pitch raising at the head of accent phrases. The presenter concluded that of these five phenomena, only ④ should be treated as involving conditional allophones. (Kikuo Maeakawa, Emiko Hayatsu)

今後の活動予定 (2019年4月～2019年9月)

● 国際日本語教育 部門共催

「日本語の習得：テンス・アスペクト」

日時：2019年6月29日(土) 13:00～17:30

場所：東京外国語大学 本部管理棟2階 中会議室

～米国で第一線の言語習得研究者による講演～

13:00～14:20

南雅彦(サンフランシスコ州立大学教授)「英語と中国語を母語とする日本語学習者の"語り"-時制と態からの考察」

14:40～16:00

白井恭弘(ケース・ウェスタン・リザーブ大学教授)「外国語学習の科学：テンス・アスペクトの習得」

16:20～16:40

望月圭子(東京外国語大学教授)「日本語と中国語のアスペクト複合動詞の習得：学習者コーパスからの知見」

16:40～17:00

ファム・ティ・ティン・タオ(東京外国語大学博士後期課程)「ベトナム母語話者による日本語アスペクト複合動詞の習得」

17:00～17:20

ローレンス・ニューベリー・ペイトン(東京外国語大学博士後期課程)「語彙的アスペクトと言語学習—複合動詞「V1+こむ」を例に—」

17:20～17:30

全体ディスカッション

主催：科研基盤B(17H02357)『国際連携・高大連携による双方向英語・中国語・日本語学習者コーパスの研究』

● 国際日本語教育部門主催

『多様化する日本語教育』第3回研究会

日時：2019年7月18日(木) 15:00～16:30

会場：留学生日本語教育センター棟 213教室

○プログラム

15:00～15:05

趣旨説明

15:05～16:05

浦由実氏(アン・ランゲージ・スクール成増校 専任講師：日本語教育)「ICT時代における教師の授業設計を考える--日本語教育の現場の実践から」

16:05～16:30

ディスカッション

● 夏季セミナー 2019

「言語・文学・社会」—国際日本研究の試み—

日時：2019年7月24日(水)～26日(金)

10:10～14:10

会場：東京外国語大学府中キャンパス

研究講義棟 102室

講師紹介：

24日

☆ ラ・ギョウキン氏 国際日本研究センター特任研究員・銘傳大学(台湾)

☆ ユン・ホスク氏 サイバー韓国外国語大学(韓国)

☆ 郭連友氏 北京外国語大学(中国)

☆ ピヤワン・アサワラシアン氏 タマサート大学(タイ)
25日

☆ 米谷匡史氏 東京外国語大学(日本)

☆ アダル・ラジャ氏 国際日本研究センター特任研究員・ピッツバーグ大学(アメリカ)

☆ サトミ・キタハラ氏 リオデジャネイロ大学(ブラジル)

☆ 小那覇セシリア氏 ラプラタ国立大学(アルゼンチン)

26日

☆ 秋廣尚恵氏 東京外国語大学(日本)

☆ アイドゥン・オズベッキ氏 国際日本研究センター特任研究員・チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学(トルコ)

☆ 蕭幸君氏 東海大学(台湾)

☆ 徐翔生氏 国立政治大学(台湾)

※ 同時開催「サマースクール院生研究発表会」

日時：7月24日(水) 14:20～18:00

7月25日(木) 14:20～17:30

会場：東京外国語大学府中キャンパス
研究講義棟 104、105、106室

● 国際日本語教育部門主催

『多様化する日本語教育』第4回研究会

日時：2019年9月12日(木) 15:00～16:30

場所：東京外国語大学留学生日本語教育センター棟 103室

○プログラム

15:00～15:05

趣旨説明

15:05～16:05

荒川洋平氏(東京外国語大学大学院国際日本学研究院教授)「地域日本語支援者への研修をめぐって～ミニ日本語学校ではない日本語教室とは～」

16:05～16:30

ディスカッション

● 対照日本語部門主催

『外国語と日本語との対照言語学的研究』第28回研究会

日時：2019年9月28日(土) 14:00～17:50

会場：東京外国語大学 語学研究所(研究講義棟 419室)

○プログラム

14:00～15:00

西畑香里氏(東京外国語大学：通訳翻訳研究)「通訳者のキャリア開発プロセス実態調査研究—通訳概論への応用—」

15:10～16:10

児倉徳和氏(東京外国語大学：記述言語学、シベ語(満州語口語))「シベ語と日本語のモダリティの対照—「のだ」と「ている」を中心に—」

16:20～17:50

大藪正彦氏(静岡大学：ドイツ語学)「翻訳から見えてくる日本語らしさ—日独語の出来事の捉え方をめぐって—」